

太宰治「走れメロス」について  
—— 日本における＜ダモン話＞の軌跡 ——

奥 村 淳  
(山形大学名誉教授)

山形大学紀要（人文科学）第18巻第4号別刷  
平成29年（2017）2月

# 太宰治「走れメロス」について —— 日本における＜ダモン話＞の軌跡 ——

奥 村 淳

(山形大学名誉教授：ドイツ文学・比較文学)

＜ダモン話＞とは太宰治「走れメロス」(「文藝」、昭和15年5月1日発行)で知られる西洋古来の伝承の総称である。ギリシア・ローマに発するこの伝承において友達を人質にする者の名前はダモンが普通であり、メロスは少ない。そこで以下においてはこの伝承をまとめて＜ダモン話＞と呼ぶことにする。

＜ダモン話＞は明治4年に日本で紹介されて以来、太宰治「走れメロス」に至るまでその数は多い。教科書を始めとして児童読み物になり、歌舞伎や学校劇の題材となり、宴会の余興の題目となり、軍隊の訓話にもなった。＜ダモン話＞と構造が類似したものを含めるとその数は多い。<sup>1</sup>ここではまず日本における＜ダモン話＞の軌跡をたどり、次にその歴史における「走れメロス」の位置を考察する。<sup>2</sup>

## (一) 日本における＜ダモン話＞の軌跡

### 1. 明治4年9月：ボンヌ(箕作麟祥訳述)「泰西勸善訓蒙」下 名古屋・名古屋学校

フランスのボンヌの主として小学生向けの教科書の翻訳に＜ダモン話＞がある。<sup>3</sup>佐久間象山に発する＜東洋道德、西洋芸術＞という当時の一般的な認識を覆す書で、明治初期の有力な修身教科書となった。＜ダモン話＞の概略はこれに尽きる。：

「第百八十章：朋友ト交ルハ(中略)朋友ノ窮乏ナル時ハ之ヲ扶ケ朋友ノ危難ニ陥イラントスル時ハ之ヲ救フ可シ此時ニ当テハ死ヲ顧スシテ之ヲ為ス可シ」

「第百八十一章：古「シラキューズ」国王「デニース」其学士「ダモン」ヲ死刑ニ処セントセシ時「ダモン」ハ死ニ就ク前家族ニ別ヲ告ケ且家事ヲ処置ス可キ為メ期日ヲ定メ猶予ヲ得テ其家ニ至ランコトヲ乞ヘリ其友ニ「ピチアス」ト云フ者アリシカ保人(ウケアヒニン)トナリテ若シ「ダモン」ノ獄ニ歸リ来ラサルコトアラバ自カラ代テ刑ニ就ク可キコトヲ獄吏ニ約セリ然ルニ「ダモン」ハ期日ニ至リ果シテ其言ノ如ク獄ニ歸リ来リ自カラ囚レニ就キテ従容死ニ処セラレシコトヲ乞ヘリ国王「デニース」此事ヲ聞キ朋友交誼ノ厚キニ感シ「ダモン」ノ罪ヲ赦シテ剩ヘ自カラ両士ト交ヲ結ハンコトヲ求メシトソ是レ朋友交誼ノ厚キ規範ト為スニ足ル可シ」

2. 明治15年7月：篠山晃三郎編「小学修身編：巻二」沼津・小松敬吉／大場学校（静岡県下伊豆国君沢郡大場村）

「朋友」の例話として「1」を引用。

3. 明治15年8月：鈴木忠篤編「小学格言訓話：巻二」浜松・斎藤書房

＜友＞の項で「1」を引用。

4. 明治18年9月：中村善兵衛編、宇田川文海閲「新編三枝物語」大阪・和田文宝堂

「序」に「その題号を真の友といふなる泰西の古詩を基礎にし」たとある。それが「シラー『人質』を指していることは明らかであろう。」<sup>4</sup>とされる。ただし筋立てでははるかに複雑かつ波乱に富む。信州・三枝藩の苛斂誅求の暴君三枝秋政、改革の直訴を試みて処刑と決まった百姓民蔵そしてその朋友信濃屋清七が主たる登場人物である。宇田川には自由民権家坂崎紫瀾との共著がある。民蔵という名前の由来であろう。

5. 明治18年11月：馬島珪之助（訳）「ヘステル氏第二読本独案内」東京・誠之堂

クルトマン（Wilhelm Curtman）の「Das treue Fischlein（信実ナル小魚）」が＜ダモン話＞である。：＜漁夫に釣られた子供の金魚が戻ることを約束して放してもらう。漁夫は1年後に戻った金魚の誠実さに驚いて再び小川に放してやる。＞

6. 明治20年10月中旬：バロー（山本勝助訳）「啓蒙脩身要訓：巻二」東京・成城学校

「友誼」：「信ヲ守ル」：＜名声を妬まれて死刑のダモンの身代を「友人」のピチヤスが引き受ける。「河水暴漲」のためやっと間に合ったダモンとピチヤスは自分こそ死刑と言って争う。「両友相争ヒ決セズ、人民観ル者皆ナ感泣シ、群呼シテ之ヲ赦サンヲ請フ、暴君亦為メニ感動シ、二人ヲ放還ス、人民之レヲ見テ相慶シ、送テ其家ニ至レリト云フ、」＞

7. 明治21年7月：石井音五郎、石井福太郎編「尋常小学修身口授教案：巻三上」浦和町・文華堂

下級小学校第3学年の口授授業のための本である。：

「第六章 友達の交りには信実を主とすべし、ダモンとピチアスの話

目的 友人の間ハ、堅く約束を守り、信実を主として交るべし、と諭す、

西洋の「シラキューズ」といふ国に、ダモンといふ学者がありましたが、何か其国王の機嫌に触れた事があって、国王より、殺す罪にあてる、といふ申渡を受けました、(中略)時にダモンの友達ピチアスといふ者が出掛けて来て、申し上げるにハ、(ピチアス)「私が證人になりますから、一度家に帰してやって下さい、若しダモンが来ぬならば、私が代って殺されませう」と、約束いたしました、(中略)そこで二人が互に「私が仕置に預らう、イヤあなたを殺す筈ハない、私が殺さるゝ、」と云って、争ひ居ました、すると国王にハ、此兩人ハ互に信実を以て交る、といふのに感じて「斯様な人達のしたことに、悪いことハない筈じや、人々の手本にしたい」といって、ダモンの罪を赦された、といふことでありま

す、友達といふものは、実に貴いものでありますから、其貴い友達にハ、信実には交はらねばなりませぬ、」

8. 明治22年2月：「両羽之燈」第二号並号外（合本）：両羽社（山形県羽前国南村山郡山形横町）

「号外」の安達峰一郎「警世談林」に「ダモンとピチヤストノ交り」がある。安達は山形県出身で国際司法裁判所の所長となった人物である。「警世談林」は第一高等中学校の特待生時代のもので、政治家に「国ニ竭スノ誠意ナキ」を糾弾し、政治はダモンとピチヤスの「交誼」の如く「誠ノ道」をもってなされなければならないとする。ダモンは馬で駆け戻すが、ピチヤスは自分ひとり生き残るつもりはなく2人で争う。：

「王ハコノ有様ヲ見ソナワシ、(中略) 二人ノ死ヲ宥メ、二人ニ向ヒテ懇コロニ其交ヲ求メケリトゾ 朋友ノ相愛ハ神聖ナリ、清浄潔白ニシテ一点ノ汚斑ダモ止メザルモノナリ、(以下略)」

ダモンは「白泡嚙マセタル汗馬」で駆けつける。この形は英国 John Banim のドラマ “Damon and Pythias” (1821年ロンドン初演) を嚆矢とする。この悲劇と米国ピシアス騎士団 (The Order of Knights of Pythias；創立へ1864年) の事情などについては拙論〔注：1.〕を参照されたい。

9. 明治23年1月：「村山会報告書. 第四回」（編輯人並発行人：佐々木忠蔵）

安達峰一郎の弟と思われる安達幸二郎が「偶感」において国を愛する者は男女の交際は断つべしとし、「ダモンピチヤスノ交際」の如く「朋友ノ相愛ハ神聖ナリ」とする。

10. 明治24年6月：榎並則忠編「少年立志編：修身教育」大阪・明昇堂

「立志門」に「「ダモン及ピチヤス」の交誼を尽せし事」がある。有名な哲学者ダモンは「事を以て罪」に触れて王の怒りを買う。戻ったダモンと保証人ピチヤスは死を巡って争う。国王は「交誼の厚きに感じて」2人を「放還」して「交」を結ぶ。

11. 明治24年10月：森本園二編「新編小学修身事实全書」大阪・盛文館

「交際」に「ピチヤスの友誼遂にダモンの罪を救ふ」がある。（「1」と同じ。）

12. 明治25年6月：永松毅軒編「国民振気編：青年立志」大阪・積善館

「忠節」「孝悌」など12編に分かれ、「立志修身」の「模範」を教えている。「信義」編は「朋友ノ間」の「信義」を説く。「信トハ心を誠ニシロニ詐リヲ言ハザル事ニテ義トハ之ガ為メニハ如何ナル難事ニモ当リテ助クル事ナリ」その例話のひとつがピチヤス友ニ代リテ死刑ニ就カントスル事」である。（「10」に類似）

13. 明治26年3月：巖谷小波、霧山人編「独逸文壇六大家列伝」東京・博文館

シラーの „Die Bürgschaft“ を「人質」と訳した最初である。（内容への言及はない。）

14. 明治26年9月：村上千秋編「初等教育修身口授用書」大阪・明晃堂

「10」の編者と題名を変えたもの。

15. 明治26年12月：勝彦蔵「新編三枝譚」大阪・勝彦兵衛

歌舞伎作者の勝彦蔵が「4」を9幕の台本にしたもの。緊迫感溢れる出だしからすでに作者の力量が偲ばれる。

16. 明治28年9月：松原善蔵編「独逸読本 第参」松原善蔵（東京・独逸語学校）

ドイツ語教科書。シラー „Die Bürgschaft“ 所収。主人公の名前はMöros（メロス）。

17. 明治29年6月：賀来熊次郎編纂「独逸語学階梯：教科用自習用 上巻」東京・南江堂

巻末の読み物にシラーの „Die Bürgschaft“ がある。（主人公の名前はメロス。）賀来は第五高等学校教授で、夏目漱石と同僚である。

18. 明治30年5月：賀来熊次郎編「独逸語学階梯案内」東京・南江堂

「17」の解答及び解説の書。Schillerをシルレルでなく、シラーと表記しているのはこの時代としては珍しい。「保証（Die Bürgschaft）」の眼目は「朋友ノ信義」とある。

シラーの譚詩 „Die Bürgschaft“ はこれ以降「愛と信（人質）」（「24」）、「保証」（「26」）、「保証（ダーモンとピンティアス）」（「29」「124」）、「ダモンとピチユス（真の知己）」（「53」）、「ダモンとフィニチアス」（「57」）、「ダモンとピチアス」（「97」「122」）、「人質」（「139」「154」）そして「担保」（「165」）と訳されることになる。（「愛と信」とは詩中の „Liebe und Treue“ の訳である。）

19. 明治31年4月：第五高等学校竜南会編「新撰独文読本」東京・南江堂

„Freundschaft“（友情）はドイツ語散文。：＜ダモンとピュティアスは互いにTreue（誠実）を誓いあっている。暴君は約束を守った者のTreueに感激して2人を赦免し、友情の三人目としてくれるよう頼む。＞

実質の編纂者の余田司馬人は庶務兼書記の助教授。後に熊本高等工業学校の教授（英語）。

20. 明治31年8月：（中村道夫訳）「ボック氏第三読本直訳註解 上之巻」東京・金刺芳流堂

「5」を「忠実ナル小魚」として訳出。

21. 明治34年7月：リギヨル（前田長太訳）「正義」東京・前田長太（出版人）

リギヨル（Ligneul）は日本北緯公会神父で前田はその高弟。「交誼と摺友の道」に＜ダモン話＞がある。：＜「友誼洵に深く、相互の為ならば死すとも悔みずと誓ひたること前後百回もあり、」というダモンとピチアス。ピチアスと「人質」になったダモンの「信」に感じた「悪王デニス」は二人に友にしてくれることを乞う。＞

ここでは親友に身代を引き受けてもらう者の名前はダモンではなくピチアスである。名前の逆転は「22」を始として稀ではない。

22. 明治34年 9 月：桜井彦一郎編「Famous stories, retold by James Baldwin, adapted to japanese students」東京・文武堂

本文は英語のみ。米国 James Baldwin (1841-1925) の “Fifty famous stories” (1896) の翻刻で “Damon and Pythias” を含む。:

“A YOUNG man whose name was Pythias had done something which the tyrant Dionysius did not like. For this offense he was dragged to prison, … Then a young man whose name was Damon spoke and said, – “O king ! put me in prison in place of my friend Pythias, and let him go to his own country…He still had faith in the truth and honor of his friend… At last the day came, and then the very hour. Damon was ready to die. His trust in his friend was as firm as ever;…The tyrant was not so bad but that he could see good in others. He felt that men who loved and trusted each other, as did Damon and Pythias, ought not to suffer unjustly. And so he set them both free. “I would give all my wealth to have one such friend,” he said.”

最後に言われる暴君の感慨は古くから存在していた。ドイツ Sebastian Brantの「愚者の船 (Das Narrenschiff)」(1494) には<金の切れ目が友情の切れ目、DemadesとPythiasのような友情は失われた>とある。また18世紀ドイツのM.G.Lichtwerの寓話 „Damon und Pythias“ は<親友こそがこの世の宝物>と教えている。

Baldwinの読み物は以後もっともよく使用される英語教科書のひとつとなる。

23. 明治35年 4 月：James Baldwin (鹿島長次郎編輯)：“Fifty famous stories” 東京・興文社 (明治45年 3 月発行の訂正 4 版使用。)

英語本文だけの中学校の教科書用。

24. 明治35年 8 月：三浦白水訳「西詩余韻」仙台・佐藤養治 (発行者)

ハイネやゲーテの詩と並んでシュラー (Schiller) 「愛と信 (人質)」がある。ダモンは遅れることによって暴君を満足させるつもりはない。遅れたら自分も死ぬ気である。:

「彼今二個の犠牲を屠らば/「愛と信 (Liebe und Treue)」との二つを悟らん (中略) 信実 (まこと; Treue) ! / 嗚呼そは空しき妄想にあらず」

25. 明治36年 9 月：マーデン (中村敬三訳)「品性之修養」東京・大日本実業学会

米国・成功雑誌社のマーデンは「成功を望む者は、(中略) 先ず善良なる品性を修養せざる可からず。」とする。「履約」が「最も卓絶したる良性」であり、「履約の特性を有したる人の中にて、最も有名なるは、デーモン氏及びプシヤス氏なり。」として<ダモン話>を簡潔に紹介。

26. 明治37年 9 月：葉山万次郎「独逸国民文学史」富山房

「シルレル」の「『保證』 (ディ、ビュルグシャフト)」とある。

27. 明治38年5月：帝国文学会編「帝国文学：第十一卷臨時増刊第二（シルレル記念号）」東京・帝国文学会

桜井正隆「詩人としてのシルレル」に『『ビュルグシャフト』』について言及がある。

28. 明治38年11月：鍾美堂編集部編「Favorite stories for the young」東京/大阪・鍾美堂（明治39年3月発行の訂正再版を使用）

Baldwin “Fifty famous stories” の抄出。“Damon and Pythias”を含む。

29. 明治39年1月：秋元蘆風訳「シルレル詩集」東京・東亜堂

「保證（ダーモンとピンティアス）」所収。ダーモンは間に合わなければ自分も死ぬ気である。それによって「暴主」に『愛と信とを茲に知らむ！』というのである。：

「嗟（あゝ）！実（げ）に、〔信実（まこと）〕は空想（あだ）にあらず。——」

「註」に「本詩は、素より友誼、誠実を旨として歌へるもの」とある。

30. 明治39年11月：坪内雄蔵「中学修身訓：巻二」東京・三省堂書店（明治42年2月発行の訂正4版使用。）

「第六課：約束ヲ破ルハ一種ノイツハリ」に続く「第七課：約束セバ必ず遂ゲヨ」の例話にくダモン話>がある。：

「第七課 約束セバ必ず遂ゲヨ

約束セバ必ず遂ゲヨ。（中略）ぐりいすノ学者びしやす、時ノ暴君だいいおにしやすノ怒リニ触レテ、罪ナクシテ死刑ノ宣告ヲ受ケケルガ、びしやすハ一タビ故郷ニ帰り、家族ニ告別センコトヲ願ヒケリ。王冷笑ヒテ「一タビ放タレシ者ガワザワザ殺サレニ帰ル筈ナシ。偽リテ逃レントスルナラン」トテ許サザレシヲ「不安心ニ思シ召スナラバ、帰ルマデ身代リニ」トテ、親友でいもんトイフヲ差出ダシケレバ、日数ヲ限りテ帰郷ヲ許サレケリ。カクテ其ノ日数モキルルバカリニナリシガ、びしやすヨリ何ノ便リモナシ。サテコソ逃ゲシナラントイフ噂高クナリケレド、身代リノでいもんバカリハ獄中ニアリテ少シモ不安心ノ気色ナク、必ず其ノ日マデニハ帰リ来ルベシトイヒヲリケリ。イヨイヨ当日限リトイフ日ハ来リヌ。びしやす約束ニ背キシ上ハ、其ノ身代リトシテでいもんヲ死刑ニ処セザレバナラズトテ、罪ナキでいもんハ引出ダサレ、斷頭台ノ下ニ据エラレタリ。サレドモでいもんハワルビレタル様子モナク、オチツキテイヒケルヤウ「親友びしやすハ決シテ人ト約束セシコトヲ破ルヤウナル男アラズ。帰リ来ラザルハ、何事カ思ハヌ妨ゲノ生ジタルナラン。」カクイヒツツ徐カニ頭ヲサシノベテ刃ヲ受ケントシタリケル時、びしやすハ駆けケツケ来リ、刑場ニ走り入りテ、途中大風ニアヒテ船ノ進マザリシタメニ時日後レタリシ由ヲ語り、速カニ死刑ニ処セラレタシト願ヒ出デケレバ、流石暴君だいいおにしやすモ深く二人ガ間柄ノ立派ナルニ感じ入り、カクテコソ真ノ友トモイフベケレ、アア我レモカカル友ヲ得タシト羨ミ誉メ、終ニ二人トモニ赦シケリ。」



31. 明治41年3月：新渡戸稲造（桜井彦一郎訳）「武士道」東京・丁末出版社

「第十四章：婦人の教育と地位」に「彼のダモンのピシアスに於ける、（中略）交遊の美譚は、我国亦た其類を枚挙するに遑あらず」とある。

32. 明治41年4月：西川三五郎編「学校新聞資料」（出版社：不明）

学校新聞にそのまま転載できるようになっている読み物集。「デーモンの信義」はBaldwinが種本で、7回に分割されている。身代りとなったデーモンは友ピシアスの「名誉と信義」を疑うことはない。

33. 明治41年7月：三土忠造「西史美談」東京・三省堂

欧米の「美談」集。「第十七：真の知己」が＜ダモン話＞である。ピチアスは「果敢と専横」の王デオニシユスを殺害しようとして捕えられ、死刑を宣告される。老父母に会いに行くピチアスのために「無二の親友」ダモンが身代わりを申し出る。：

「最早、彼の一命は、瞬息の間に迫った。この時早く、彼の時遅く、ピチアスは、息も絶え絶えになって、飛び込んで来た。彼れは、途中、風波のために支へられたのであった。（中略）船が陸に着くや否や、ひた走りに走って、刑場へ飛込んで見れば、ダモンの眼は、猶開いて居たので、目の死も何も忘れて、欣喜雀躍した。デオニシユスは、二人の信義と愛情とに感激して、人間本来の善心に立帰って、ピチアスの刑を許した。若し、唯の一人でも、こんな親友を持つことが出来るならば、王者の富も地位もいらぬ。とは、王の心の奥の奥から出た歓声であった。」

全体にBaldwinの影響が大きい、「ふたりの信義と愛情」などシラーの影響も見られる。三土は「中等国文典」（明治31年）を著して欧州に留学した後、東京高等師範学校教授などを務めた。昭和4年に政界に転じ文部大臣や大蔵大臣を歴任。中島健蔵「回想の文学④：昭和十四年—昭和十六年」（平凡社、昭和52年）に「ピストルをぶらさげた用心棒」を連れた三土と電車内で遭遇して反感を覚える件がある。

34. 明治41年11月：市川源三、大島庄之助「補習常識読本：上巻」東京・育成会出版部

「約束せば必ず遂げよ」は「30」そのままである。

35. 明治42年3月：吉岡向陽、高野班山編（鰭崎英朋画）「梅若丸（日本）真友（西洋）」（家庭お伽文庫第31編）東京・春陽堂

高橋晶子氏が「ヘカッチ」第4号（通巻13号；日本児童文学学会北海道支部機関誌、2009年）において発見を報告・論考された物語「真友」はシラーに拠っている。：＜デーモンは国王ジョニシアスの「暴虐」に憤慨したのであり、王は「信」と云う者わ夢の様なものでわなかつた。」ことを知り、「仲間に入れて呉まいか。」と願う。＞



36. 明治42年8月：ボルドウキン（織戸正満訳）「新訳フェマス物語」東京・日進堂

「序」にBaldwinは「品性修養の資」になるとある。：

「第31章 ダモンーフキシアス

此にフキシアスと謂ふ若い人があつて暴君デオニシアスの意に障る様な事をした。王は非常に怒つて此罰として彼を監獄に禁固し遂に死刑に処せられるべき日さへ定められた、此フキシアスの生れ故郷は都を去る遙か遠方で、どこか自分が死罪に処せられない内に今一日父母、故旧に遭ひたいものだと思つて居たのである。此に於て彼は王に『どこが宅に皈つて父母を始め、私が敬愛して居る人々に今生の暇乞ひをしたいから、少しの暇を下さい、私は暇乞ひさへ済めば直ぐ此处へ皈つて来まして、御処刑を受けます』と哀願した。すると王は冷かなる笑を浮べて、

『余は如何にして汝が汝の約束を違へざるを知るを得べき、汝は余を欺き自ら逃げんとするのだろふ、不屈者め』と怒鳴りつけたのである、

すると側に居つたダモンと謂ふ青年が王に叩頭して（曰）く

『大王よ、どこぞフキシアスの身代りとして私を牢に入れて下さい、そうすると彼は自分の故郷に行つて万事の片付けをなし、知己故旧にも暇乞ひをする事が出来ませう、私は彼の決して約束を破る様な男じやない事を知つて居ります彼は必ず此处へ歸つて来ませう、併し彼が若し約束の日限までに歸つて来ない様な事があれば私は彼に代つて潔く御処分を受けませう』と云ふた。

流石の暴君デオニシアスも驚いて遂にフキシアスをして一先づ故里に帰省するを許し、其帰るまでダモンを冷き鉄窓に繋いで置く様にと命令を下したのであつた。

夫から段々月日もたちフキシアスを死刑にする定めの日も一日一日と迫つて来た、が本人は一向歸つて来ない。王は仕様事なしにダモンを嚴重に監禁して置く様に看守に厳命を下した、ダモンは敢て逃げ様ともしない、実にダモンは其友フキシアスの信実にして而も廉恥を重んずべきを尚信じて居るのであつた、彼の曰く『若しフキシアスが其日まで来ない様な事があれば、夫は決して彼の過失ではないので、側の者が彼を抱き止めて去らせないので違ひないのだ』と、

遂に処刑の日が来た、処刑されんとする其時刻ともなつた、憐れなるダモンは將に死罪を行はれんとし、其準備をして居るのである彼は神色自若として尚彼れの友人フキシアスの前約を違へざるを信じて疑はず、更に自分は己れが畏敬せる人のために如何なる苦痛を受けても悲しくはないと謂つて居るのである。

憐むべし、彼は遂に看守に引き出され、將に断頭台に行かんとする其刹那、出会頭にフキシアスが戸の外に立つて居つた、実にフキシアスは途中暴風雨や難船に遇つたので斯くも歸るに暇がとれたのであつた、而して彼は一に定刻までに歸る事が出来ないだらふかと謂

ふ事を非常に憂慮して居つたのである、

茲に於て彼れはダモンに親切に挨拶をし、自ら手を後にして看守に身を委ね、兎に角後れがらも時に間に合つて来た事を非常に楽しく思つたのである

デオニシアス名は暴君と呼ばれて居るが他人の善行をも見分ける事が出来ない程の悪人じやないのであるから、彼はダモンとフキシアスの間に於ける如く斯くまで兩人が相愛し相信じて居るものに対し苛刑を加ふるの甚だ道ならざるを知り遂に兩人を許し、尚『余は斯くの如く相信じ、相疑はない朋友を得る事が出来れば余は余の富を換えても惜しくはない』と謂つたそうである、」

37. 明治42年9月：林董訳編「修養乃模範」東京・丙午出版社

林は松本良順の弟。ヘボン塾で学び、函館戦争にも参加した。初代駐英大使。全体に公正、廉潔、信義などの言葉が目立つ修養の書である。「アラビヤ」人の任侠信義」が＜ダモン話＞である。：＜大昔アラビヤ国で死刑と定まった貧しい男タイは処刑の猶予を懇願し、寵臣チエリツキが身代わりとなる。タイは駆けて帰還する。王は寵臣の「仁と義侠」とタイの「信」を守る行動に心を動かされ、寵臣の寵は倍増し、タイは多くの物をもらう。＞

これに「編者曰く」として「希臘の古事「デーモン」「ピチヤス」の談」が続く。ピチヤスは「王に叛ける罪」をもって死刑であり、王は「兩人の友誼の深さに感じて」死を許す。

38. 明治42年9月：丸山通一編「独逸詩文選」中央大学（明治43年4月発行の訂正増補再版使用）

Schiller „Die Bürgschaft“ 所収。（主人公はメロス）

39. 明治42年9月：西川三五郎編「児童百話：学校家庭」〔正編〕東京・文盛館

「32」の「デーモンの信義」と同一。

40. 明治42年10月：村上辰午郎「実践倫理講義」東京・金刺芳流堂

教師及び中学校生徒用の参考書。「知人編」の「朋友の本務」は「約に背かず、詐欺の言行なく、よく誠実の心を以て交る」という「信義」を説く。その例話として初版（明治35年）にはなかった＜ダモン話＞が追加された。：＜暴君ダイオニシヤス一世に反したピシアスは死刑となり、親友ダモンが身代を申し出る。「ピシアスは約の如く帰つて来たので、流石の暴君ダイオニシヤスも、大にその友誼のかたきに感じ、直ちに刑を免し、且ダイオニシヤスは、此二人が奉信するピサゴラス派の信徒となつた。」＞

続く「社会編」の「生命」には国家の生命は一人の生命よりるかに貴重であり、「徒に生命を惜む」者は「一般国民の標準以下」とある。初版では「軍人が国家のために戦死するなどは、いふまでもない名誉である。」となっていた。軍人に求められていたものが一般国民に拡大されたことになり、日露戦争の影響が感じられる。

41. 明治43年10月：ボードウキン（近藤敏三郎訳）「西洋五十名話」東京・精華堂

「品性修養の一端」とする書。「ダモンとフ井シアス」の2人は王の臣下であり、処刑場に歩む「信義の人」ダモンの「友を信ずる一念は大盤石」である。

42. 明治43年11月：文部省「高等小学読本 卷一」大阪・大阪書籍

明治43年11月18日発行、12月31日翻刻発行で明治44年4月から使用された。（翻刻発行の許可が与えられたのは3つの会社のみ。）大正11年4月に青森県明治高等小学校に入学した太宰治も使用したであろう教科書である。：

「 第三課 眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち、手を執つて、互に談笑するが、一旦利害相反すれば、忽ち仇敵となるやうな者は眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。

昔伊太利のシシリー島にピチウスといふ男があつた。或罪に依つて、國王の前に引出されて、死刑を言渡された。ピチウスは今生の思出に老父母の顔が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて来るから、此の世の名残に今一度父母に會はせてもらひたいと歎願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。

ピチウスの無二の親友にダモンといふ若者があつた。王に向つて、

私はピチウスの親友で御座います。彼は決して二言致すやうな者では御座いません。

どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやう願ひます。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて参りませんやうなことが御座いましたならば、私をお仕置下さいませ。

と言つた。王は此の友情に感じて、ピチウスの願意を聞届けて、ダモンを獄屋に入れた。

（中略）

彼の一命は寸刻の間にせまつた。此の時早く彼の時遅く、ピチウスは息も絶え絶えになつて、かけこんで来た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。（中略）船が陸に着くや否や、ひた走りに走つて刑場にかけて見れば、ダモンはまだ生きて居たので、餘りのうれしさに目の死も何も忘れて、手の舞ひ足のふむ所を知らなかつた。

王は二人の信義と愛情に感激して、ピチウスの罪を許した。

若し我にもこんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も榮華もいらぬ。

とは王の心の奥の奥から出た歎聲であつた。」

「33」と表題や「信義と愛情」など表現の一致が少なくないことが注目される。

この教科書は幾度となく修正が施された。たとえば大正元年10月の修正版では「ピチウス」が「ピチウス」とされている。また大正15年の修正改版では「眞の知己」は第13課に移動し、

「ピチウス」は「ピチアス」となった。また典拠がシラーとBaldwinであることは周知のことだった。(「57」「122」等参照)

43. 明治44年3月：国民教育研究会編纂「明治四十四年度より新に使用する国定教科書教授細目」東京・啓成社

「真の知己」：「一貫の旨趣は朋友相信ずるの情とそれを感激したる王の心とで活躍し来る。」

44. 明治44年3月：渡辺要「高等小学読本字解：第一学年用（前期）」大阪・教育書房

「真の知己」について「信義」と題する粗筋をが述べられている。

45. 明治44年3月：普通学研究会編「高等小学読本字引：第一学年前期用」東京・市田元蔵

46. 明治44年4月：ボールドウキン原著（吉田潔訳註）「著聞五十譚」金刺芳流堂（大正4年5月の訂正5版使用。）

“Damon and Pythias”（デモンとピセイアス）。

47. 明治44年11月：豊田八千代「国定新読本の研究：高等科」東京・学海指針社

「真の知己」の原拠はBaldwinであり「相信じて疑はない」ことが「眼目」とある。

48. 明治45年1月：誠文館編輯所編「最新各科表解：自習用書 高等科第一学年前期」東京・誠文館

49. 明治45年2月：普通教育研究会編「全科表解：高等小学第一学年用前期」東京・鍾美堂

「真の知己」：「人は必ずこの知己を持たねばならぬが、真の知己は殆ど少ない。」

50. 明治45年3月：稲垣国三郎「高等国語読本形式及内容の研究」岡崎・本文書店

51. 明治45年3月：入江保「高等小学読本教授参考書：前編」荻野素助（山梨県）

「真の知己」：「或罪、これは暴君デオニシアスを殺しに行った罪であるけれども、こんな事は国体に合はぬから或罪としたのである、子供には知らせない方がよい。」

52. 明治45年3月：東京教育会編「全科詳解 高等小学第一学年前期」東京・東雲堂

「真の知己」という言葉の意味は「真の親友」とある。

53. 明治45年4月：後藤薫、小山保雄、小松久夫「国定教科書に見えたる泰西教材の研究」東京・明誠館

横組みの左頁に教材の原文、右頁にその対訳。「真の知己」については典拠としてBaldwin “Damon and Pythias” と「ダモンとピチウス（真の知己）」を掲載。収録したものは総て「教訓美談」であるという。

54. 明治45年5月：国語研究会編纂「（吉田氏）中学国文教科書字解：第一学年用」東京・東雲堂

吉田弥兵「中学国文教科書 卷一」の「十八：知己」の字解。（「61」参照。）

55. 大正元年8月：国語教授研究会編「受験準備兼用高等小学読本自習書. 一年の巻」東京・三友堂

56. 大正元年9月：教育学術研究会編「小学手紙の文：綴方自習」大阪・武田交盛館

「真の知己」：ピチユスが遅れた理由は「大水」である。

57. 大正元年10月：馬淵冷佑「高等小学読本参考」東京・弘学館書店

「真の知己」の出典として「シルレル詩集」の „Die Bürgschaft“ を「ダモンとフィニチアス (Damon und Phinitias)」として訳出。：「王は二人の犠牲を/殺して友の愛情と/信義の念を味へよ。(中略) げにも信義是一片の/空言にてはあらざりき」。

Baldwinの「ダモンとフィシアス」も出典として訳出されている。

58. 大正元年11月：北沢種一「実際教授高等小学読本研究. 上」東京・敬文館

59. 大正元年11月：文部大臣官房図書課編「国定教科書意見報告彙纂. 第一輯」文部大臣官房図書課

読本「真の知己」について新渡戸稲造「武士道」(「31」) ではダモンとピシアスの役割が教科書と逆という指摘が神奈川県女子師範学校から出されている。

60. 大正元年12月：佐々木保次郎編述「精神訓話：初年兵教育参考資料」東京・兵事雑誌社

陸軍歩兵中尉による「軍人勅諭」に則った16週にわたる講話・訓話集。日露戦争の当初、列強によってその矮身短軀を嘲笑された日本兵は、武士道、日本魂そのままの戦い方で評価を一変させたのに今や昔日の面影は消えかけている。このような悲憤慷慨に発して兵士が武士道と大和魂をもって「皇恩」に報いるよう求め、「一命を捨つるが君に報ゆる軍人の役目」と説く。第11週「軍人は信義を重ずべし」の例話「デーモンとピシアスの信義」は「39」の表題を変更したもの。＜ダモン話＞は軍人に「一命を捨」て「君に報ゆる」ことを教えるのに格好の材料となった。残りの例話は歩兵第32連隊（山形）の二等卒（兵）が病気の新兵を世話して褒賞を受けたという話（「信義なる水口二等卒」）であり、美濃の儒学者が江戸に出た友達の妻子の面倒を見る話（「伊藤冠峰の信義」）である。いずれも生死に関わるものではない。＜ダモン話＞は日本の軍国主義形成に寄与したのである。

61. 大正元年12月：吉田弥平編「中学国文教科書. 卷一」（修正8版）東京・光風館書店

「30」と殆ど同一の「知己（坪内逍遙）」所収。「中学国文教科書. 卷一」は明治39年10月発行で、改版の度に大幅な改変がなされた。「知己」の初出は修正5版（明治44年2月）以降とおぼしく、かつこの修正8版が最後だった可能性が高い。（読本「真の知己」との重複の影響であろう。）吉田の教科書は青森中学でも使用されたらしく、太宰が「一命虎の巻」と書き込みをした参考書「中学国文教科書詳解：卷一」（東京辞書出版社、大正11年）が残されているという。（日本近代文学館ホームページ掲載の「太宰治自筆資料集」参照；筆者未見）

62. 大正2年2月：明誠館編輯所編「最近各科自習用書：大正二年度改正. 高等科第一学年前期」東京・明誠館  
「真の知己」：「真の知己：ホントノトモダチ」、「信義：マコト」
63. 大正2年2月：明誠館編輯所編「国定全科自習用書：大正二年度改正. 高等科第一学年前期」東京・明誠館  
「62」と書名は違うが内容は同一。
64. 大正2年3月：普通学研究会編「「高等小学読本字引. 第一学年前記用」大阪・此村欽英堂  
「真の知己」：「信義：ざりがたきこと」とある。
65. 大正2年3月：普通教育会「高等小学読本字引. 卷一第一学年前期用」東京・普通教育会
66. 大正2年3月：国語教授研究会編「国語読本形式及内容の新研究. 卷一高等科第一学年用」東京・尚文館
67. 大正2年4月：集文館編輯部編「吉田氏中学国文教科書詳解. 第一学年ヨリ第五学年マデ」（修正8版）東京・集文館  
「61」の「知己」について「知己：自分の心中を知る人」とある。
68. 大正2年4月：国語漢文学会編「（吉田氏）中学国文教科書詳解」（8版）東京・深谷中央堂  
「67」と内容は同じ。
69. 大正2年4月：普通教育会編「高等小学読本注解漢字仮名遣」東京・益文堂
70. 大正2年4月：西川三五郎編「児童百話：学校家庭」東京・東北堂  
「39」（西川）の第6版だが表紙と出版社が違う。
71. 大正2年4月：岩淵孝「高等小学読本語句詳解. 卷一」東京・廣文堂書店
72. 大正2年5月：大日本国民英語学会編纂「Fifty famous stories」東京・英語研究社  
Baldwin「ダモンとピスィアス」の原文と訳註。
73. 大正2年6月：国民教育研究会編「高等小学読本解釈. 卷一第一学年前期男女兼用」東京・東京出版社
74. 大正2年6月：平澤一男編述「高等小学読本教材研究. 第一学年用」佐賀市・平井平治  
「真の知己」：「（ピチユスは）何か王の御気に召さぬ罪を犯したる若者とすべし。実はダイオニシアス王暴君なるが故に之を殺さんとせし罪なれども我国体に合せず。」  
原拠として「シルレルの詩集」を挙げ、Baldwinにも言及。
75. 大正2年6月：津田士徳編「高等小学読本字解・第一学年用前期・後期」東京・大学館



76. 大正2年6月：関西中学会「自習之友、中学一年号」第一輯

「61」の参考書。「知己」：「互いに赤誠こめて相疑はざる知己の友情」とある。

77. 大正2年8月：瓊浦同窓会編「小学校教授細目、中篇国語、附・郷土」

長崎県師範学校同窓会の編。「ダモンノ話ハシルレル集ニ據シモノナリ。」

78. 大正2年8月：田中好賢・迫小平「小学教授ポケット叢書、第一篇」東京・六盟館

「真の知己」：Pitiusの読み方はピチユスよりピチウスの方がよいとある。

79. 大正2年9月：野田千太郎編「入営準備壮丁指針」東京・浅見文林堂、名古屋・浅見文昌堂

国民皆兵制度に「最も関係の深い壮丁」に「軍隊の精神風紀等」を教えるのを目的とする本。陸軍中将以下14名の高級将校（名古屋・第三師団）が推薦者として名を連ねている。「訓話」の「服従」の項に「軍人の生命は入営と共に、陛下に捧げたものである。故に己を空うして、上官に服従するのでなくては、陛下の股肱たる職分を全うする事は出来ぬものである。」とある。「読方」の「約束せば必ず遂げよ」は「30」をひらかなに直したもので「軍人勅諭」の「軍人は信義を重んずへし」の例話である。「生命は陛下に捧げ」という軍人にとって死生を超えて約束を守り、信義（Treue）を尽くすくダモン話>は格好の例話だったのである。

80. 大正2年12月：秋元蘆風訳「訂補改版シルレル詩集」東京・東亜堂

「29」の改版。「保證」の原詩 „Die Bürgschaft“ が追加されている。

81. 大正3年1月：田辺鹿蔵「教育勅語戊辰詔書拾壺回講義」養父郡教育会/兵庫県石田書店

兵庫県の小学校長の児童に対する講演集。「教育勅語」の「朋友相信シ」の関連で「真の知己」に言及している。同じく「義勇奉公」に関連しては日露戦争の「大勝利」を決定したものは軍備や体格ではなく、「死を鴻毛より軽くして君の為国の為に尽す」（「軍人勅諭」）という「軍人の精神」であるとしている。

82. 大正3年1月：普通学研究会編「高等小学読本の練習、第一学年前期」大阪・山本文友堂

83. 大正3年1月：普通学講習会編「高等小学全学科字引、第一学年前期用」大阪・田中宋栄堂

84. 大正3年5月：普通学研究会編「中学程度入学試験問題集、大正三年度」名古屋・浅見文昌堂

愛知県第一師範学校の国語科問題に「真の知己」出題。「真の知己」が中学校などの入試問題となった例は少なくない。



85. 大正4年10月：鷺見亀五郎編「Fifty famous stories（フィフティ、フエーマス、ストーリース）」東京・有朋堂書店（大正4年12月発行の訂正再版使用。）

Baldwinの原書の翻刻。

86. 大正5年4月：蘆田恵之助「読み方教授」東京・育英書院

よく知られた国語教育家の読本研究書。「真の知己」など「高等小学読本」の「修養に関する材料」の課について「知つただけでは何等の価値もない」とある。

87. 大正6年2月：国語自習研究会「高等小学読本自習書：男女共用 第一学年前期用」東京：新盛館：

88. 大正6年2月：薫風逸史「修養訓話」東京・酒井芳文堂

「家庭夜話などの資料」で、「ピチアス友の死刑に代らんとす」がある。：＜死刑の友人ダモンのためにピチアスは「保証人」となる。帰還したダモンとピチアスの「交誼の厚いのに深く感じ」た王はダモンを赦し、兩人と交はりを結ぼうと言う。＞

89. 大正6年6月：南条文雄「仏教人生観」東京・中央出版社

「交友篇」の「五：真の知己」に続く「六：我が身を捨てゝ」は「犠牲的精神」を「国民の精神」と位置づけ、その根底にあるのは親子、君臣、夫婦、兄弟そして朋輩間の「絶大なる友愛の情」であるとする。その例話のひとつが「ダモンとパイシアスの親密の情は暴君の心をも感化す」である。典拠は不明だが「身代り」を引き受けるのはダモンである。真宗大谷派の碩学南条は日清、日露などの戦争における軍人の戦死を天皇に対する「まこと」の奔出と位置づけ、その「犠牲的精神」を称揚する。

90. 大正6年9月：米田克己「精神修養青年講話」大阪市・岡本増進堂

「人と朋友関係」の「(十) 信義」は「信義とは言つたまゝ、を行ひ自己の本務を完うするにある。」とし、軍人は「より多く信義の道を守らなければならぬ。」と説く。「万民斉しく上に、大元帥を仰ぎ奉る我等は皆軍人たるの心得がなからねばならぬ。」これに続く「(十一) 交道の典型」が＜ダモン話＞である。おおむね読本「真の知己」に拠っているが、ダモンには妻子がある。ダモンとピチアスのような「信義」は大元帥に対してこそ向けられるべきことが自ずと理解できる仕組みになっている。

91. 大正7年8月：小山内薫「正直もの（童話）」（「赤い鳥」八月号掲載）

＜ダモン話＞を換骨奪胎した兎と狼の物語。：＜狼に捕まって食べられる予定の兎が許婚兎に別れを告げるために「兎質」をおいて出発する。狼は戻った兎を許す。＞

92. 大正8年5月：福永秀夫「英文対照フィフティ・フエマス・ストリーズ独習」東京・岡村書店（大正9年10月発行の第5版使用）

「ダモンとピシアス」

93. 大正9年3月：吉野芳洲編「現代に於ける青年の進路」東京・博愛書院出版部

青年がデモクラシー、民本主義という「新思想」に動かされやすいことを憂慮する編者は青年に「飽くまで皇国民たるの精神気魄」を保つことを求める。日本は「先ず君主あつて而る後に臣民」である。そのための徳目のひとつ「約束は必ず履行せよ」の例話が「30」である。

94. 大正9年3月：中井修「心身修養偉人の言行」東京・下村書房

「ダモンとピシ阿斯」では帰獄したダモンは「従容として死刑に就いた。」とある。ダモンが死ぬ唯一の例である。（「序」の書き手のひとり新渡戸稲造である。）

95. 大正9年11月：鳥取県教育会編纂「鳥取県青年読本 巻一」東京・同文館（大正13年12月の修正再版使用。）

その「真の知己」は「高等小学読本」と同じ。

96. 大正9年11月：鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯（童話）」：「赤い鳥」11月号

ドモクレスの剣等ディオニシアスの故事を述べる「一」に続く「二」が＜ダモン話＞である。：＜ピサゴラス学徒のピシ阿斯はディオニシアスに反抗していると睨まれて死刑となり、デイモンが身代となる。帰って来たピシ阿斯に暴君は愕いてその罪を許す。「彼は、これまで嘗て人を信ずることが出来なかつた、哀れな人間です。（中略）ですから彼はピシ阿斯とデイモンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりもうらやましくて堪りませんでした。」暴君は二人に仲間に入れてくれるように頼む。＞

英国ヤング(Charlotte M. Yonge)の“A Book of golden deeds”(1864)の“The Two friends of Syracuse”と一致する部分が多い。石井桃子がイギリスの本で読んで感激したという「メロスとセリヌンティウスの逸話」(石井桃子：太宰さん；「石井桃子集：第6巻」、岩波書店、1999)はこれかも知れない。

97. 大正10年5月：田上新吉、原田直茂「修正高等小学読本教授書：男子用女子用合本 巻一」東京・目黒書店

「真の知己」の原典として「シルレル」の「ダモンとピチウス」及びBaldwinを指摘。

98. 大正10年6月：三浦喜雄、児玉安積「高等小学読本教授書：教材精説実際教法 第一学年前期用」東京・宝文館

「真の知己」：「要旨」に「二人も堅固な宗教的信念の上に立つてゐたので斯の如き所行が可能であつた事も或は知らせてもよからう。」とある。「宗教的信念」とはピタゴラス学派のことであり、「解説」の「ピチユースとダモン。」がその内容を説明している。＜堅固な信念＞を抱く者は「真の知己」が教えるように「死生の境」を超越する行為が可能である。（その信念は「宗教的」とは限らない。）また「罪」について問う児童に対しては「或る学説を信じてゐるが故に、ディオニシユースに反抗してゐるやうに取られたのは無理もない事である。」と教えるとよいとある。児童は「学説」いうならば思想が死刑の対象となることを知ることに

なる。広島高等師範学校訓導の著者が大正9年の森戸事件を意識していたことは間違いない。「死生の境」を超越する信念が向けられるべき対象は自明のことだったのだ。

99. 大正10年6月：小山内薫「石の猿」（単行本）東京・赤い鳥社

「91」を収録。「序」に「正直もの」は「露西亜から輸入」とある。

100. 大正10年10月：ゲエテ（中島清訳）「ゾルヘルム・マイステル（後編）」新潮社（世界文芸全集第5編）

「註釈」に「ダアモンとフィンティアスー或はピティアスーとの友誼」とある。

101. 大正10年11月：中野伝治、大杉謹一「高等小学読本解説、一卷」東京・明治図書

「真の知己」に関連して「真の知己でない友」の例話として「イソップ物語」の「熊と二人の旅人」が示されている。

102. 大正10年11月：鈴木三重吉「救護隊」（単行本）東京・赤い鳥社

「デイモンとピシアス」（「96」）は「序」によれば「自己を第二とした、人に対する博大な思ひやりと、本当の固い友愛」を描いたもの。全体で7話を収録。

103. 大正11年9月：葉多黙太郎「子供さんのお芝居：全十二編」大阪・岡田文祥堂

「少年劇」の「友達」はローマ軍の捕虜となった少年ジュリアンとその友ベテロの話である。筋は読本「真の知己」に沿っている。ジュリアンは病気の母に会いに行く。

104. 大正11年11月：山崎貞「フィフティ・フェイマス・ストウリズ解釈」東京・北星堂

「Damon and Pythias（デーイマンとピシアスの交り）」

105. 大正11年11月：萩之家蝶二編「すてきに奇抜な青年劇」大阪・岡田文祥堂

酒席、青年会その他の会合のための「余興集」。奇術、声色、落語そして青年劇などからなる。「声色」に「ハムレット」があるなど時代がしのばれる。青年劇のひとつ葉多黙太郎「真（まこと）の友」は読本「真の知己」を原拠にしたもので牛を盗もうとした男を殺して死刑の青年サプライムと身代わりの友人シドニアの物語である。

106. 大正11年12月：北星堂編輯所編纂（Baldwin）「Fifty famous stories（フィフティ、フェイマス、ストーリーズ）」東京・北星堂

“Damon and Pythias” 所収。原著の翻刻。

107. 大正12年3月：春日靖軒編「現代の精神修養」東京・文武書院

春日は「成功者」になるためには「修養」が必要と説く。「処整の修練」冒頭が「30」と同じ「約束せば必ず遂げよ」である。

108. 大正13年1月：桃井広人「子供に聞かせる世界名話五十集」東京・誠文堂

Baldwin “Fifty famous stories”の翻訳。（配列は変更。）“Damon and Pythias” は「友の真実」と題されている。

109. 大正13年2月：中村兵衛「人格と趣味：修養道話」大阪・榎本書店

大正12年9月の大震災後の「荒みかかった国民の精神の復興」のための「精神修養」の書。「身代り死刑の囚人」は「30」とほぼ同じである。

110. 大正13年6月：ワルター・クルーゲ（木下一雄訳）「新独逸の教育・詩情より導かるゝ修身教授」東京・モナス

「汝と友」の「友誼！」の項に「フィンチアスとダーモンとは、また艱難に於ける伴侶である。シルレルはこの二人の友誼を古典的な形式で讃美した。」とある。

111. 大正13年10月：土田耕平「鹿の目：童話集」東京・古今書院

燕の太子丹と荊軻の物語である「咸陽宮」に＜ダモン話＞の要素がある。「咸陽宮」は童話「身代り」に続くことから作者は＜ダモン話＞を意識していたと考えられる。

112. 大正13年12月：江部鴨村編「美談逸話全集」東京・一人社（大正14年1月発行の第3版使用）

＜師弟－友人＞の項に「王の涙」がある。：＜シラキースの横暴な国王に対する一揆の企てが露見し、首謀者ダモンは捕へられ死刑と決し、親友のピシアスが「人質」を名乗り出る。帰還したダモンとピシアスは自分こそ死ぬべきと争う。その光景を眺めていた王は2人を許す。『君達二人の友情のなかへ僕をも加へてくれ給へ』王の両眼には大粒の涙が光つてゐた。』＞

113. 大正13年12月：ゲーテ（中島清訳）「ヴィルヘルム・マイステルの修業時代（後編）」（ゲーテ全集第6巻）東京・聚英閣

「100」と同じ註釈がある。

114. 大正14年3月：佐藤武「趣味の修身読本：国定修身書準拠—学校用家庭用、尋常第五学年用」東京・博文館

「尋常小学修身書：巻五」に応じた訓話集。「第二十二課：信義」の訓話が「ピチウスとダモン」である。おおむね「真の知己」風である。教科書は加藤清正を主人公にして「約束を実行」という「信義」を教えるものである。：＜暴君を殺そうとしたピチウスが捕らえられ、死刑を言い渡される。王とピチウスの対決の場面やピチウスが「声もたえだえに群衆を押しわけて」刑場に飛び込んで来ること、あるいは最終場面の「王様万歳」は「走れメロス」を思わせる。＞：

「あゝ、王宮もいらぬ。王の位もいらぬ。お前達の信義こそ、何よりの宝だ。今日から、今から俺も友達にしてくれ。」さすが、もののあはれを知らぬ王も感極まつて泣くのであつた。「ピチウス万歳！ダモン万歳！王様万歳！」の声は群衆の中から、期せずして起つた。空にはもう星が輝いてゐる。」

「万歳」の声が起こるのは太宰「走れメロス」を含めてふたつだけである。

115. 大正14年10月：愛知県飛島小学校「教材劇化の実際」愛知県海部郡蟹江町・平井書店

海部郡飛島村の飛島尋常高等小学校教員一同の手による修身教科書と読本を元にして実際に上演された創作劇集。「真の知己（三幕）」は読本「真の知己」の劇化である。：＜ピチユスは「命を君に捧げ」、王様に「忠勤」して満7年の「軍人」だが、「心にもない過失」により死刑と定まった。「無二の親友」ダモンが「身代り」に立つ。帰還したピチユスはダモンは自分こそ死ぬべきと争う。王は2人を許す。＞

劇の最後は「走れメロス」の王の人間不信を思わせる。：

「(王) 余は生れて六十年、余の見てきた世の中は、それ金と名誉、奢と我儘、金の為には主を落し、兄弟を蹴り、親さへ殺す世の中ぢや。自分の栄華の為には主も臣もない。去る日も来る日も虚偽と争ひ。見るもの聞くもの汚れ果てたる世の中に、お前達の様な人間が、まだまだおれの国に生きて居つてくれたのか。有難い、頼母しく思ふぞよ。だが、ダモンや、ピチユスや、余はさみしいわい。俺にはこんな友達がない。もし余にこんな友人が一人でもあつてくれたなら、この王者の富貴も栄華もいらぬわい。おゝ、二人とも近ふよれ。俺にもこんな友人が一人あつたらなあ。(閉幕)」

王の慨嘆が「走れメロス」における王のそれに通ずるものがあることは注目される。

116. 大正14年11月：南条文雄「仏教より観たる人の一生」東京・中央出版社

「89」の改版。書名が変更されている。

117. 大正14年11月：オルコット（清涼言訳）「小さき人々：全訳」東京・双樹社

Louisa May Alcottの“Little men”（1871）の全訳。「十四：デーモンとピシアス」の「訳者註」に「暴君ダイオニシアスに反抗を企てたピシアスは死刑を宣告された。」とある。

118. 大正14年12月：児童芸術研究会編纂「大正遊戯曲集：唱歌遊戯・童謡舞踊」東京・音楽社

「唱歌劇：真の知己」は読本「真の知己」に基づく。原作にはない士官セーラーが全体の進行役を形成し、主役の2人は「良友ダモン・罪人ピチユウス」と単純化されている。

119. 大正15年4月：鳥取県教育会「鳥取県青年読本参考書」鳥取県教育会

「真の知己：ピチユスとダモンとの友情を感じさせ、朋友親愛の念を強めようとする。（青年としての修養材料）」（「95」参照）

120. 大正15年4月：有富郁夫・万福直清「高等小学読本精義：巻一・二」東京・東京出版社

大正15年2月の「高等小学読本」改訂に伴う教師用の本。（「真の知己」は第13課に移動し、文言もいくつか変更された。また「農村用」が新しく発行されたが、そこに「真の知己」はない。）「鑑賞批評」に「ダモンとピシアスとの友情は、（中略）あまりにおめでたく出来すぎてゐて」子供達の共感と呼び難いし、「理想的人物を取扱つてあつて、現実味がない。」と批判的である。

121. 大正15年6月：友納友次郎「高等小学読本の真使命：男女用．巻一上」東京・明治図書  
「真の知己」：「要旨：何年たつても人を感動させずに置かない美談です。」
122. 大正15年9月：友納友次郎「新高等小学読本巻一の原據」（蘆田書店パンフレット第一編）東京・蘆田書店  
「真の知己」の原拠としてBaldwinの翻訳とシラー「ダモンとピチアス」を掲載している。（後者は表題を除いて「57」に同じ。）
123. 大正15年9月：エドワード・キリヤム・レーン英訳（森田草平訳）「千夜一夜物語．第三巻」東京・国民文庫刊行会  
「第十八章：第三百七十一夜の半ばに始まつて、第三百八十一夜の半ばに終る」の本文に続く「逸話」のひとつ「一殺人者の話」が＜ダモン話＞である。：＜1頭の駱駝を巡って人が死に、犯人の若者が死刑になる前に3日間の猶予をもらう。（以下割愛）＞
124. 昭和2年4月：秋元蘆風（選註）「註釈シルレル詩選」東京・南江堂  
太宰が弘前高等学校入学した年に発行された高等学校向けのドイツ語教科書。「Die Bürgschaft. 保証。」の主人公はDamon。暴君は「そして誠、それはしかし空想ではない。」と述懐する。「解説」はHyginusの寓話をあげて「この物語を材料として作られたシルレルの詩に於ても、また朋友の信義といふ事が眼目となつて歌はれてゐる。」とある。
125. 昭和2年5月：長尾豊「短い対話と小さい劇」東京・厚生閣書店  
「王の約束」は読本「真の知己」を踏まえた劇。：＜山中で鬼に食われそうになった王が戻ることを約束して猶予を願う。戻った王を鬼は食うことができない。＞
126. 昭和2年7月：大瀬甚太郎「中学新修身：巻一」東京・東京開成館（昭和3年1月の訂正再版を利用。）  
「第十五：朋友」の例話「友情」はBaldwinに沿っている。ただし「シラキウスの勇者」ピチアスが暴君ディオニソス暗殺を企てたという変更がある。
127. 昭和3年2月：現代實際教育研究会編著「読方教育篇（下巻）」東京・章華社  
「真の知己」：「異常な事件を取扱つて真の知己なるものを力強く描写」とある。
128. 昭和3年6月：大瀬甚太郎「中学新修身教授資料」東京・東京開成館  
大瀬「中学新修身」（全5巻）の解説書。現代の現実主義・快樂主義は道德的破産に至るから、理想主義・人格主義を「高調する立場」が「中学新修身」であるという。「巻一」の「友情」の原典はBaldwin “Pythias and Damon”とあるが、原典と人名の順序が逆である。  
（「巻四」の「社会の秩序」に「宴会中妄りに席を離れ或は舞踊するなどのことなく、余興は食事の前後に」とあるのは面白い。）



129. 昭和3年12月：宮川菊芳、三浦成作「高等読本を戯曲化せる児童劇脚本」東京・厚生閣書店

第一部「ダモンとピチアス（二幕）」は読本「真の知己」の劇化。筋は教科書に沿っているが、細部には時代の雰囲気抜きにしては考えられない変更がある。：

「第一幕

王：ピチアス！ 汝が仲間を組んで、国内を騒がさうとした罪は明白なるによつて、汝をシシリイの法律に従ひ死刑に処するぞ！

ピチアス：陛下！私もシシリイの市民でございます。シシリイの為を因つて、私の致しました事柄が、どうして死刑に相当致しませうか。どうぞ御情を垂れさせへ。

王：汝の精神は美しい。されど汝の手段は過激であつた。一人のピチアスを許す事は今後、千万の過激手段者を奨励する事になる。国事に関する取締りは嚴重にせねばならぬ。」

「若い時から国事に奔走致しまして、寧日がございませんでした。」というピチアスはダモンによれば「立派な国土」である。ピチアスの言動は昭和7年に起こる五・一五事件を予告している。被告たちは陸軍軍事法廷で＜身を挺して国家革正＞の行動に出たと主張し、国土と呼ばれたりした。全国から膨大な数の助命嘆願書が提出され、軍事法廷に陸軍少将朝香宮が臨席するという異例も出来た。勾坂検察官も「その究極の目的は国家の隆昌発展を期するにありて全く愛国の赤誠に基く純真無くのものたること極めて明瞭」としながら、法への違反は明白として反乱罪で禁固刑を求めた。この論告求刑はピチアスに対する王の言葉にそっくりである。「太陽をも貫く信義と愛情」に感激した王はピチアスの罪を許し、ダモンと二人を改めて「相談相手」に指名する。「朕は汝等の助けにより、このシシリイの国を、汝等の如き信義と愛情の中に打ち建てねばならぬ。」

王は「過激手段」を容認したことになる。五・一五事件の微温な処分が二・二六事件の遠因のひとつとなったことを思えばこの児童劇は時代の雰囲気の証人と言えるだろう。（著者は東京高等師範学校訓導。）

130. 昭和4年2月：大瀬甚太郎「女子修身教科書第二修正版教授資料」（昭和11年3月発行の修正3版に拠る。）

「巻一」の「朋友」の例話「友情」は「126」と同じ。

131. 昭和4年7月：秋元喜久雄編「独逸譚詩選」東京・日独書院

奥付だけが日本語。Schiller „Die Bürgschaft. (Damon und Phintias.)“ 所収。

132. 昭和4年10月：James Baldwin（後藤一郎訳註）「Fifty famous stories（フィフティ・フェイマス・ストーリーズ）」東京・白水社（昭和6年2月発行の第5版使用。）

「デーイマンとピツィアス」：ピツィアスは「友人の信義と名誉」を信じて疑わないし、「友



人に対する信念」は揺るがない。

133. 昭和4年9月：James Baldwin（佐藤正治訳註）「Fifty famous stories：Vol. II.」東京・英文学社

「デイマンとピスィアス」

134. 昭和5年4月：エフ・ジュー・ゴULD（本地正輝訳編）「西洋小学修身読本：五・六年の巻」東京・金の星社

「約束」の「アラビア人の話」が＜ダモン話＞である。Frederick J. Gould “The Children’s book of moral lessons” の “First series”（1899）が原著で、その “Keeping promises” の例話のかなり自由な翻訳である。：＜貧乏な百姓タイが禁を犯し王によって死刑となる。タイは一時帰郷を哀願し、友人が代わりを名乗り出る。タイ（Tai）は「夕陽を背に受けて（中略）土埃をあび、汗を流しよろめきながら」駆け戻る。王はタイを許すと言う。「王様は、満足さうに、晴れやかに笑ひました。太陽が沈んだ後のアラビアの野に、涼しい夕風がそよぎ出しました。」＞

全巻でただ1枚の挿絵は彩色で夕陽を背に駆けるタイを描いたものである。この話が本の主要物語であることを示している。

135. 昭和5年4月：リチャード・フランシス・バートン（大宅壮一等訳）「千夜一夜 第四巻」中央公論社

「アルカーターブのオーマールと若い漂浪者の話」たる「第三百九十六夜と第三百九十七夜」が＜ダモン話＞である。内容は「123」と殆ど同一。（原書には “Damon and Pythias” についての注がある。）

136. 昭和5年4月：Baldwin（濱林生之助監修）「ヒィフティ・フェイマス・ストーリズ講義」東京・健文社（昭和5年5月発行の第5版使用）

「デーイマンとピッィアス」

137. 昭和5年6月：秋田喜三郎「全高等小学読本の本質的研究」明治図書

138. 昭和5年11月：安島健等編「五年生の修身」大阪宝文館

「名譽の八百哩」が＜ダモン話＞である。：＜普仏戦争の最中瀕死の敵将校との約束を果たすために脱走し、帰営して銃殺される兵士ホンブート。「良心の命令にもしたがひ、また軍隊の規律にも服した、誠実にして信義ある、ハンガリーの兵士ホンブートの体は、朱にそんで地にたふれてをりました。」＞

139. 昭和5年12月：青葉コドモ会編「童話の六年生：国定教科書を標準とした」東京・国華堂

シラー „Die Bürgschaft“ のほぼ忠実な訳である「人質」所収。ダーモンは暴君に「愛と信」

## 太宰治「走れメロス」について

を示そうとして急ぐ。王も「信と云ふものは空想ではない。」と言う。

### 140. 昭和6年1月：中西芳朗「感動美談」（学校家庭教育資料叢書）東京・コドモ芸術学園

「約束を守ったお話二つ」に＜ダモン話＞がある。：普仏戦争において捕まり死刑と定まった反乱軍の少年が病母に別れを告げて約束通り戻って許される話に続くのが以下である。：＜ダイオニシヤス王の怒りにふれて死刑と決まったピシアスは3日の猶予を嘆願し、親友デーイマンが身代わりを名乗り出る。そして帰路、刻限の午後3時の20分前に港に着いたピシアスは「飛行機のやうに」かけだしてやっと間に合う。王は『あゝ 私にもこんなよいお友達が一人あつたらな』と言って許し、「ふたりを今まで通り重い役におつけになりました。』＞

これに「命は君に」と「命は国に」が続く。前者は日露戦争の艦上で勇敢さを発揮した二等水兵が「天皇陛下万歳」と叫びながら海中に沈んで行く話であり、後者は「国の為に命はないものと覚悟して戦に出た」というイギリスの少年の物語である。時代における＜ダモン話＞の占める位置は明らかである。また「飛行機のやうに」走るピシアスは「黒い風のやうに走った。」（3、175）メロスを思わせる。

### 141. 昭和6年3月：河野伊三郎「高等小学読本指導精案：学習本位 教材観照 男女用 巻一」東京・東洋図書

「真の知己」：「信義：まごころ」

### 142. 昭和7年1月10日：軍事教育研究会編「国の礎」東京・聚文館（昭和7年1月15日発行の再版を使用）

「序」は満州事変に対する国際世論を批判して「大国が強きを好み、暴威を振ひ、或は国際信義を無視して横に車を押す時」は「武力に據て我が正義を貫き、祖国を護るより外はない」と説く。日本は万世一系の天皇が統治して臣民を愛撫し、「臣民は忠君愛国の赤誠」を捧げる。「一切を犠牲にしても、皇室と国家とをいつまでも擁護するのは、我等日本人が世界に対して誇とするところである。」このような思想の下「青年子弟」に向け「軍人勅諭」に合わせて古今の逸話が語られる。「信義篇」の例話の多くは日露戦争を題材にしており、そこでは死がまさに「軍人勅諭」の教える如く「鴻毛よりも軽」く扱われている。その最後「約束せば必ず遂げよ」は「30」とほぼ同じであるが、親友同士の約束信義が臣民と皇室・国家の関係に転じている。＜ダモン話＞は「臣民」が「皇室と国家」のために「一切を犠牲」にすることの象徴となったのである。

### 143. 昭和7年10月：浦口文治「新評註ハムレット」東京・三省堂

太宰治が「新ハムレット」執筆の際に傍らに置いたとされる研究書。第3幕のハムレットの科白の註釈に「DamonとPythiasとは（中略）名高い刎頸の親友、支那で所謂管仲鮑叔式の交友である。」とある。

144. 昭和9年5月：オルコット女史（清涼言訳）「小さき人々：全訳」東京・現実處

「117」と同じだが、出版社が違う。

145. 昭和10年2月：大瀬甚太郎、河田嗣郎共著「商業学校修身書教授備考」東京開成館（昭和10年5月発行の再版を使用）

「朋友」の資料として掲載の「友情」は「126」と同じ。

146. 昭和10年2月：長谷山峻彦「高等小学校劇集成」東京・大正書院

「真の知己」の筋は読本「真の知己」に沿っているが、ピシ阿斯はピタゴラス学説を信じて「輪廻転生（中略）精神は、肉体は死んでも（中略）上界に帰つて形の無い至福な生涯を送る」と死を恐れない。また上海事変の＜肉弾三勇士＞を扱う「三勇士」についてはその劇化に反対する「反軍国主義の軟文士流の、批難」を一蹴し「この種の劇によつて、青少年に感激を与へることは決して低級なことではない」とする。（同じ素材の「三勇士」は昭和17年に国民学校「初等科国語二」に入る。）同じ著者による「軍国美談劇集：小学校学芸会用」（昭和13年）は「お国のため」に勇ましく死ぬことを奨励する劇集である。その思想は一貫しており、学校劇「真の知己」も例外ではない。

147. 昭和10年3月：鷲山重雄「童心訓化尋二修身指導書」東京・明治図書

「尋常小学修身書：巻二」（昭和9年）の「ヤクソク ヲ マモレ」の主人公は軍神広瀬武夫中佐である。その「訓化補材」の「ダモンとフキシアス」は読本「真の知己」と同じである。それが軍神の物語の「補材」として尋常小学校の2年生向けとされるところに軍国主義という時代の本質が伝わる。広瀬中佐の約束を守る信条は「軍人勅諭」の「軍人は信義を重んずへし」にあるわけで、「童心訓化」の方向はいうまでもない。

148. 昭和10年3月：安部清見「新修身指導案：尋二」東京・明治図書

「尋常小学修身書：巻二」の「シャウヂキ」の「補充資料」として小山内薫「正直もの」がある。：＜一匹の兎が狼に捕らえられ数日後には食べられてしまう予定である。兎は許婚に別れを告げに行くために許婚の兄兎に「兎質」になってもらう。危うく間にあって帰った兎を狼は大層讃めて許す。＞

149. 昭和10年6月：岩瀬法雲「高等小学読本第一義疏 巻一」東京・同志同行社

「真の知己」について「信義と愛情其のもの、やうな二人の親友の存在は余りに現実離れしてゐる」とある。

150. 昭和10年6月：教育資料編纂会編「式日・行事・随時月次講話揭示実演資料」東京・第一出版協会

「学校学級講話」9月用の「真の友」は読本「真の知己」に拠っている。ただピチウスが「暴政」をしく王様のデイオニソスを殺そうとしていたとか、フィロストラが「王の家来」でピチウスをあざ笑うなどの変更がある。最後に「約翰伝福音書」（明治元訳）の「人その友の

為に己の命を捐つるは此より大なる愛はなし」が引用されている。（「1」にも引用がある。）

151. 昭和11年4月：小西重直編「昭和実業修身書教授資料 卷一」東京・金港堂書店

新井白石を扱う「真の友人」の「敷衍資料」の例話に「ピチウス (Pythius) とダモン (Damon)」がある。読本「真の知己」そのままである。

152. 昭和12年5月：丸山林平「国語科読方教材研究 高一（三）」東京・成美堂書店

「真の知己」の原拠としてBaldwinをあげている。

153. 昭和12年7月：小栗孝則訳「新編シラー詩抄」東京・改造社（改造文庫）

昭和5年に発行された同じ訳者の「シラー詩集」の全くの新訳・改編。「人質 譚詩」が初めて収録された。（「走れメロス」と一致する語句も多くその大きな典拠であることは定説である。）「解説」にはひどく簡潔に「この詩はイタリーの伝説中に材料をとつてゐる。」としかない。小栗が昭和23年に発行した「シラー瞑想詩集」（小石川書房）にも「人質」はない。：<最終場面、メロスは「（王は）愛と誠の力を知るがよいのだ！」という思いで走る。王は「信実とは決して空虚な妄想ではなかつた」と言って二人の仲間に入れてくれるよう頼む。>

「シラー詩集」（昭和5年）の「解説」にあった「シラーの革命的精神はドイツに於て「革命の父」の名をほしいままにしてゐる。」がここでは「（シラーの）詩心を燃やす炎は常に政治的社会的情熱であつた。」へと変更された。また文庫の「発刊宣言」に当初あった「無産階級」、「民衆」という言葉も昭和11年から消えたのである。「新編シラー詩抄」の第三篇は野上巖の訳である。野上は思想問題で大学予科を蹴首された後、雑誌「唯物論研究」（昭和7年創刊）に新島繁の名前で「軍国主義的・超国家主義的教育」（新島繁「時代の青春」伊藤書店、昭和23年）に「対抗」する多くの論文を発表した。（野上は山田洋次監督の映画「母べえ」のモデルとされる。）戦後は新日本文学会の委員となり、神戸大学教授も勤めた。第三編の冒頭に位置する「ドイツのミューズ (Die deutsche Muse)」はドイツの芸術が王侯貴族の庇護によらないで「ドイツ人」が「自分でそれだけの価値を創造した」ことを称えるもので、野上の信条に一致するものがあつたと思われる。そして小栗も新日本文学会の会員だったという。（小林祥一郎「死ぬまで編集者気分：新日本文学会・平凡社・マイクロソフト」新宿書房、2012；参照）小栗は「シラー瞑想詩集」の「解題」において時代を資本主義的な社会の崩壊過程としてとらえ「新しい社会主義的機構が（中略）新しい精神の平和と新しい社会の幸福とを建設」する転換期であると考えている。近藤周吾氏が小栗訳と秋元蘆風訳を比較して小栗訳では「『暴君』で統一され、（中略）王はどこから見ても暴君<sup>6</sup>」<sup>6</sup>というのは鋭い指摘である。付加するならば小栗はシラーの原語 „Treue“ を「誠の力」「信実」と訳し、軍国主義を象徴するようなく信義>を用いることはなかつた。

（なお小栗訳「人質」は全集の「解題」（山内祥史氏）に収録されている。）

154. 昭和13年4月：安部清見「尋五新修身指導案」東京・明治図書

「尋常小学修身書：巻五」の「第十七課：信義」は加藤清正を主人公として「一旦約束したる事は、あくまで履行しなければならぬことを徹底せしむ」ものであることを教える。その「補充資料」のひとつが「114」と同じ「ピチウスとダモン」である。「教育の大眼目は「忠良なる臣民を創るにある」とする著者は第5学年教育の中心眼目を「児童をして国家に対する畏敬の信仰心と皇運扶翼の実現力を訓練」することに置く。＜ダモン話＞はそのよい例話と考えられたのである。

155. 昭和13年4月：丸山林平「高一国語教材研究」東京・成美堂

「152」に同じ。

156. 昭和13年7月：坪内逍遙訳（日高只一註）「ハムレット：シェークスピア戯曲集」富山房

「デーモンとピシ阿斯とはギリシヤ物語にある2人の親友」という「註」がある。太宰が「新ハムレット」創作の参考にしたとされる坪内逍遙訳「ハムレット」（「新修シェークスピア全集：第27巻」（中央公論社、昭和8年）にこの註はない。

157. 昭和13年9月：中井修「世界偉人言行録」東京・大洋社出版部

「94」に同じ。（本の題と出版社が異なるのみ。）

158. 昭和13年10月：新渡戸稲造（矢内原忠雄訳）「武士道」（岩波文庫）

「31」の新訳。

159. 昭和14年6月：芦田恵之助「読み方教授」東京・同志同行社

「86」に同じ。（出版社が異なる。）

160. 昭和14年10月：オルコット女史（清涼言訳）「愛の学園（小さき人々）」東京・杉並書店

「14 デーモンとピシ阿斯」（「117」、「144」参照。）

161. 昭和15年5月：太宰治「走れメロス」（「新潮」5月号掲載）

メロスは「村の牧人」である。西洋の古来伝統の牧歌においては主人公が牧人ダモンであることが珍しくなく、そのテーマは牧人の素朴な恋である。（ウエルギリウスやゲーテの「牧歌」の主人公の名前もダモンである。）太宰がメロスを「牧人」に設定し、最終場面で少女を登場させてメロスを「赤面」させるのは牧歌の影響かも知れない。

「走れメロス」の大きな典拠が小栗沢「人質」（「153」）であることは疑いないが、太宰が加えた改変のひとつに原詩のフィロストラトス（太宰ではフィロストラトス）の身分がある。メロスの「忠僕」（3、430；「解題」）から「お友達セリヌンティウス様の弟子」（3、175）への変更である。さらに「人質」のフィストラトスは「向ふからやつてき」（3、430）でメロスの行動を中止させようとするが「走れメロス」においては「メロスの後について走りながら」（3、175）叫んで走るのを止めさせようとする。メロスはすでに「濁流」（3、171）、「山賊」（3、172）という行く手を阻む二つの障害に直面しているが、この三つ目の障害がい



わば背後から現れることにした変更の持つ意味は大きい。なぜならばこの変更は約束の時間という追っ手に追われる者としてのメロスの危機的な状況をよく示すものになっているからである。そしてそれは昔話・メルヘンの〈逃竄譚〉構造を裏返ししたもののように思われる。〈逃竄譚〉の主人公は追って来るものから逃れるために自らMagie（魔法）を用いて三つの障害を出現させ、それによって逃走に成功する。昔話「三枚のお札」やグリム「水の魔女（Die Wassernixe）」（KHM79）がその典型である。たとえば「三枚のお札」に属する「食べられた山んば」<sup>7</sup>ではお寺の小僧がどんどん追いかけて来る山姥から泣きながら逃げ、和尚の機転によって危うく助かる。和尚は走りこんで来た山姥を納豆に化けさせそれを食べてしまうのである。その結末語は「はい ごちそうさま」というもので、ここに至って聞き手（読み手）はそれまでの緊張感から解放されて言いいようのない安堵感と満足感に包まれる。そしてこの現象は〈逃竄譚〉には多かれ少なかれ共通するものと言ってよい。「走れメロス」にMagieは登場しないし、障害は追っ手ではなく逃げるメロスにとっての障害である。（だから〈裏返し〉である。）しかし追っ手からの逃走の成功という結末に違いはない。群衆の「あつぱれ。」（3、177）という声や「万歳」（3、178）という歓声はそのような気持ちの表現なのである。太宰は小栗沢「人質」の群衆が「惘然として立つてゐ」（3、431）で「がやがやと動揺した」（3、432）だけであるのをこのように変更した。ここに充溢する安堵感と満足感はアンドレ・ヨレス言うところのメルヘンがもたらす「充足感」<sup>8</sup>に等しいように思われる。ヨレスによればこの「充足感」は「出来事全体が、世界の公正な成り行きに対する私たちの期待や要求に一致することによってもたらされるものである。」という。山姥が退治され小僧が助かるのは期待された結末である。そして「走れメロス」の結末もこの期待や要求に一致する。「94」に見られるようにダモンが「従容として死刑に就く」という結末は軍国主義の期待と要求にかなない、軍人精神を涵養するかも知れない。しかし安堵感や満足感は生まれるべくもない。「走れメロス」はメルヘンの構造を取ることによって「世界の公正な成り行き」に対する期待を表明したとすることができる。

（なお冒頭にセリヌンティウスが処刑されようとしている場面を描いた挿絵がある。）

162. 昭和15年6月：「女の決闘」（単行本；河出書房）

「走れメロス」所収。

163. 昭和16年1月：福島県師範学校附属小学校（他）編「高等科一年の教授要目」東京・明治図書

国民科国語「真の知己」の「原拠」を「シルレル詩集」としている。

164. 昭和16年2月：新関良三編「シラー選集：I」東京・富山房

「担保」（木村謹治訳）：〈ダモンは暴君に「愛と誠の実」を認識させたい。そして王は「誠実とは、決して空虚な妄想ではなかつた—」と言う。〉

「解説」に作品は「二人の男の友情を徹頭徹尾内的な純粹誠意あるものとして表現」しているとある。（編者による「解説」ではダモンでなく、メロスとなっている。）

165. 昭和16年5月：岡山県教育委員会編著「国民学校移行学年教材取扱要諦：教材の統合と関連・教材配当表 附国民学校令・同施行規則」岡山・吉田書店

高等科1年の国民科国語（読方）「第十三課：真の知己」について「友邦イタリヤ国民性の一斑を知ると共に、（中略）友邦への関心と友情を養ふによい教材」とある。イタリアとは昭和15年9月にドイツとあわせて三国同盟を結んでいたからこの解釈は文部省の指導によるものと考えられる。「イタリヤの国民性」とは小林秀雄「ローマの文化」（日本放送出版協会、昭和16年10月；評論家小林秀雄とは別人）によれば「強い服従心、犠牲の精神」、「よく全体のために個人を犠牲にすること」そして「ひたすら国家の発展を望んだこと」であるという。＜ダモン話＞は国家間の友情の象徴となり、＜信義＞は国家と個人の関係に変質した。

166. 昭和18年1月：「富嶽百景」新潮社（昭和名作選集（28）；「走れメロス」所収）

初出ではメロスの懷中から発見されたものは「短剣」と「短刀」と二様に表現されたが、ここでは「短刀」に統一された。石坂洋次郎「若い人」（昭和13年）の発禁理由のひとつが海軍士官の象徴である「短い剣」の扱い方だったことが想起される。

## （二）「走れメロス」と＜ダモン話＞の軌跡

＜ダモン話＞の明治時代以来の軌跡は（一）において見た通りであるが、その将来的な数は不明である。そして（一）から知られることは＜ダモン話＞の概略そのものは「1」に尽きているということである。友人に人質を引き受けてもらって死刑が延期される人物の名前はダモンが普通であるが、それがピチアスとなる場合や、あるいは2人の役割が分明でない場合がある。しかしその筋書きに大きな違いはなく、友達ふたりの友情が肝要だったことがわかる。「人その友の為に己の命を捐つるは此より大なる愛ハなし」（「約翰傳福音書」大日本聖書館、明治36年）というキリスト教の教えが「1」と「150」で言われていることはその意味で象徴的なことかも知れない。違いがあるのは＜ダモン話＞の主人公が軍人になったりする設定の仕方であり、＜ダモン話＞を「軍人勅諭」の例話としたりする解釈と受容である。そこで示されるものは明治時代から昭和時代に至る時代の状況である。

明治時代における＜ダモン話＞は教科書などでは朋友・友人関係の理想を教えるものとしてあり、それ以外においては「立志修身」（「12」）の「模範」を説くものとしてあった。「友人の交りには信実を主とすべし」（「7」）とか「朋友ノ間」（「12」）では「信義」を重んずべしとされ、＜ダモン話＞は「信実」や「信義」を中心とする友人同士の関係のあり方や人間



の生きかたを教えるものだった。Baldwin の物語が一貫して「品性修養」(「25」、「36」、「41」)に資するとされたのはその例となる。「高等小学読本」の「真の知己」(「42」)が教えるのも「信義と愛情」によって支えられて「死生の境に臨んでも、相信じて疑はない」という「真の親友」(「52」)同士の関係である。児童同士が「死生の境」に臨むことはまずあり得ないと思われるが、その覚悟めいたものを説くところに時代精神があった。また<信実>と<信義>の間には差は存在しなかったとおぼしく、<ダモン話>は登場しないが「朋友と交るさい信義を重んじべし」(天野皎編「小学修身談」、明治10年)あるいは「(朋友と交る場合は)専ら信実を盡すを以て第一(とするべし)」(関徳「小学必携修身訓蒙」、明治11年)と言われているように<信義>と<信実>に明確な違いはなかった。そして<信義>とは「約に背かず、詐欺の言行なく、よく誠実の心を以て交る」(「40」)ことを意味していた。<ダモン話>が主として個人と個人の関係のあり方を説き、人間の生きかたを教えるものとしてあったのが明治時代である。

大正時代になると事情は変化する。明治時代と同様に<ダモン話>は「交誼の厚」(「88」)さを説き、「精神修養」(「109」)の資とする見方も存在していたが、新たに「軍人勅諭」(明治15年下賜)と明確に関連させる見方が登場した。大正元年発行の「精神訓話：初年兵教育参考資料」(「60」)は「一命を捨つるが君に報ゆる軍人の役目」と規定し、<ダモン話>を「軍人勅諭」の「軍人は信義を重んずべし」の例話としたのである。「信義」や「信実」の対象が友人ではなくなったのである。(「79」、「90」、「93」、「115」についても同じことを言える。)読本「真の知己」にも新しい解釈が登場した。大正10年発行の教師用参考書によればピテュスとダモンの「堅固な宗教的信念」(「98」)が「死生の境」を越える行為を可能にしたという。「死生の境」を越える「信念」は「宗教的」とは限らない。たとえば青年に対して「先ず君主あつて而る後に臣民」(「93」)であるという「確固不動の精神」を堅持し、「約束は必ず履行せよ」と言う時、この「約束」とは「君主」の為には身命を捧げるという約束である。それは「堅固な信念」でなければならなかった。ピテュスを「命を君に捧げ」(「115」)て「忠勤」7年の軍人と設定するのも同じ意図である。

昭和時代になると大正時代の傾向は強まり、<ダモン話>は皇室と国家のために「一切を犠牲」(「142」)にするという「軍人勅諭」の「信義」そのものの体現となった。読本「真の知己」は劇化されてピテュスは「立派な国士」(「129」)となったり、あるいは軍神広瀬中佐の行動になぞらえられた。(「147」)昭和13年には<ダモン話>は「忠良なる臣民を創」(「154」)り、「児童をして国家に対する畏敬の信仰心と皇運扶翼の実現力を訓練」をするための「修身」の例話となった。そして太平洋戦争が始まる昭和16年、読方「真の知己」は「個人を犠牲」(「165」)にして「ひたすら国家の発展を望」むという軍国主義教育の教材と化したのである。<信義>は国家と個人関係に変質し、友達間の友情が国家間のものになってしまったの

である。小栗孝則がシラーの「人質」を訳するにあたって„Treue“を「誠の力」、「信実」（「153」）と訳し、「軍人勅諭」に直結する＜信義＞を避けているのは時代批判の姿勢だったと思われる。そして「走れメロス」において太宰が描いたのも小説「みみづく通信」（「知性」昭和16年1月発行）によれば「友情」（4、21）と「素朴の信頼」であり、随筆「三月三十日」（「物資と配給」昭和15年4月1日発行）の言葉を借りるならば「全人類を貫く「愛と信実」の表現」（10、205）だったのである。しかしそれはもはや＜ダモン話＞の主題ではなくなっていたのであり、太宰の小説は時代に背くものだった。「走れメロス」と同時期に構想・執筆されたと思われる随筆「作家の像」（昭和15年3月25日から3日連続で「都新聞」に掲載）で太宰が告白している不安もそこにあった。

太宰は「作家の像」において「人に誤解されて、あげ足とられ、喧嘩をふっかけられ」（10、198）ることを執拗に気にしている。津田左右吉の思想が蓑田胸喜によって「「君民離間」「国体破壊論」（蓑田胸喜「津田左右吉氏の大逆思想、第一」昭和14年12月）として激しい攻撃を受け、著作が発禁とされたのは昭和15年2月10日のことである。「走れメロス」の構想・執筆中の太宰はそのことを意識したのでないか。太宰は「作家の像」で「言へないのだ。言ひたいことが言へないのだ。言つていい事と言つてはならぬ事との区別が、この作家に、よくわからないのである。「道德の適正」とでもいふべきものが、未だに呑み込めて居ない様子なのである。」（10、196）と言う。随筆のことに見えて実はそれは「一箇月まへから腹案中の短編小説」（10、198）、すなわち「走れメロス」を指すと考えられる。（全集「解題」参照；10、596）「道德の適正」とは文部省が昭和12年に全国の学校に配布した冊子「国体の本義」に詳しく、そこでは「天皇の御ために身命を捧げること」が「忠」とされ、「実に忠は我が臣民の根本の道であり、我が国民道德の基本である。」とある。津田が非難された根本もそこにあった。天皇に「身命を捧げる」という「国民道德」こそ「適正」であるべき「道德」なのである。それがよくわからないという太宰の発言は大胆と言ってよい。「走れメロス」は国家と個人の関係となった＜信義＞を個人同士の関係に引き戻したのである。己の時代に逆らうような姿勢が太宰に不安をもたらしたと考えられる。

さらには小説の表現においてもまた「あげ足」を取られる要素は少なくなかった。

「走れメロス」が執筆・発表された時代は戦争の時代である。昭和6年の満州事変から始まって昭和12年の支那事変（日中戦争）、昭和14年のノモンハン事件そして昭和16年12月の太平洋戦争勃発。「走れメロス」は間断なき戦争の雰囲気包まれて執筆され発表されたのであり、表現にもその影響が見られるのである。メロスが「ざんぶと流れに飛び込み」（3、171）向こう岸の「樹木の幹に、すがりつく」という描写はベストセラー日比野士郎「呉松クリーク」（中央公論社、昭和14年）の戦闘場面を髣髴とさせる。そこでは「（クリークに）ざんぶりとおどりこむと、（中略）向こう岸にたどりつき、片手に楊柳をつか」んで上陸する。大陸

の戦線報道でクリークにくざんぶ(り)>という表現は珍しいものではなく、大陸の情勢に対する太宰の関心を示す一致ではないだろうか。作品冒頭の「メロスには政治がわからぬ。」(3、165)という唐突な印象を与える言葉は太宰の政治意識の表出である。冒頭の「邪智暴虐の王」の「暴虐」は支那事変に関わって「暴戾」と並んでよく使用された言葉だったことを指摘したい。たとえば近衛首相は昭和12年8月15日に事変にからんで「此ノ如ク支那側ガ帝国ヲ輕侮シ不法暴虐至ラザルナク、(中略)支那軍ノ暴戾ヲ膺懲シ以テ南京政府ノ反省ヲ促ス為、今ヤ断固タル措置ヲトルノ已ムナキニ至レリ」という声明を発表している。捕らえられたメロスは「王は、民の忠誠をさへ疑つて居られる。」(3、166)と反駁する。昭和12年9月、支那事変に対処するために開かれた臨時議会の開院式勅語は「帝国臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ」て「所期ノ目的」を達成することを求めるものであり、海軍省が昭和12年から数年間発行したシリーズに「輝く忠誠:支那事変報国美談」がある。「民の忠誠」に対する疑いは存在してはならなかった。

上述の程度では「あげ足」を取られる心配は杞憂かもしれない。しかしそれに続く文章にさらに危ういものがあることは否定できない。メロスと「平和」(3、166)を望んでいるという王のやりとりは当時の国際政治における日本の主張そのままである。「[なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。]こんどはメロスが嘲笑した。[罪の無い人を殺して、何が平和だ。]」「だまれ、下賤の者。」王は、さつと顔を挙げて報いた。」満州事変以来<世界の平和>と<人類の福祉>は日本政府のスローガンだったのであり、支那事変以降はこれに<東亜永遠の平和>が加わった。昭和15年3月30日に成立予定の南京国民政府について米内首相は3月13日に「東亜永遠の平和」のためであるという談話を発表した。これは「走れメロス」執筆の最中の発表である。そしてメロスに対する王の「だまれ」という言葉と同じ言葉が国会において言われたという事実がある。昭和13年3月3日、支那事変に対処することを目的とした国家総動員法の審議において陸軍省軍務課佐藤賢了中佐が宮脇長吉議員を「黙れ!」と一喝して問題となった事件である。結局国家総動員法は軍部の圧力のもと満場一致で衆議院を通過し、(貴族院は賛成多数で通過)5月5日から施行となった。生活のあらゆる面における統制が始まり、それは年とともに強化される一方となる。太宰はこのような時勢に対して一種のパロディをもって応じた風がある。昭和15年に発表した「鴉」(「知性」昭和15年1月発行)は「政府の権力乱用を痛烈に批判した。」(福田和也「昭和天皇:第5部」(文藝春秋社、2011)とされる森鴉外の小説「沈黙の塔」(「三田文学」明治43年11月発行)を下敷きにしたと思われる小説であるが、ここで太宰は自分を「唾の鴉」(3、108)になぞらえて時勢に対する懸念と批判の態度を示している。「どこに行くのか、私は知らない。」(3、109)列車に乗せられ、「死んで見せるより他に、忠誠の方法を知らぬ私」(3、110)なのだ。そして「私は、まじめな顔して酒を呑む。私はこれまで、何千升、何万升の酒を呑んだことか。(中

略) 酒は私を助けた。(中略) 酒は、私の発狂を制止してくれた。私の自殺を回避させてくれた。」(3、122) 昭和14年9月から「軍国政府が定めた愚劣な禁欲の日」(丸谷オ一「横しぐれ」)である興亜奉公日が始まってその日の禁酒禁煙が強制され、居酒屋・カフェは休業を迫られた。「何万升の酒」を飲むことが身体的にたとえ可能だとしても実際には許されない状況においてそれがあたかも可能であるかのように表現し、さらに酒は生きる支えだというのは時勢のパロディ化としか言いようがない。佐藤中佐の「黙れ!」事件をそもそもの始まりの象徴として見るならば、王の「だまれ、下賤の者。」という一喝は軍国政府の言動のパロディになる。軍部の独走は拡大するばかりなのに比して王は<改心>するからである。

小説の後半、山賊に襲われたメロスは「気の毒だが、正義のためだ!」(3、172)と棍棒で「一撃」して山賊を追い払う。シラー「人質」の「不憫だが、友達のためだ!」(小栗沢)を太宰は「正義のためだ!」に変更したのである。暴君の姦計を阻止することはたしかに正義の理にかなうが、ここでわざわざ「正義」という言葉が用いられているのは時局に対する太宰の関心を示している。<正義>は国際政治における日本の立場を主張するものとしてよく用いられた言葉だったからである。たとえば有田外相が大陸における日本の行動を正当化して「正義に基く真の世界平和」のためであると演説したのは昭和15年2月1日のことである。(これは少なくとも「走れメロス」が構想されている時期にあたる。)そして山賊を撃退し、激流を泳ぎきって疲労困憊したメロスの頭に浮かんだ「正義だの、信実だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。」(3、174)という想念は弱肉強食の思想である。昭和15年2月2日帝国議会において斎藤隆夫議員は<東亜永遠の平和>が目的という<聖戦>に対する疑念を表明し「弱肉強食」こそ実態ではないかと糾弾した。軍部は怒り、翌日の新聞も「失言」、「時機も時機、場所も場所だけに不謹慎」(東京朝日新聞)と批判した。そして4日付の新聞には畑陸相の「弱肉強食を本質とする所謂侵略戦争と根本的にその類を異にするのであります。」(同上)という答弁が大見出しとなった。(斎藤議員は3月7日に除名処分となる。)<新ハムレット>(昭和16年)の「あなたは、いかにも正義の士だよ。(中略)けれども、自分ひとりの正義感が、他人の平穏な家庭生活を滅茶滅茶にぶちこはす事もあります。」(4、222)というハムレットの科白はすでにメロスによって言われたも同然だったのである。またメロスは妹を結婚させて「一生このままここにゐたい」(3、169)と気の迷いに襲われるが、すぐに「いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。」と思い直す。「天皇の御ために身命を捧げ」(文部省「国体の本義」)ることが求められる兵士の身体は兵士に属するものではなかった。「畏くもこの身は、天皇陛下に差上げてをります。」(「支那事変陣中だより」白百合叢書;第12篇、昭和14年)という一人の兵士の覚悟は国民の覚悟でなければならなかった。太宰は「からだ」を捧げる対象を全く別のものにしたのである。そして「走れメロス」の最後、メロスとセリムン

## 太宰治「走れメロス」について

テイウスは「音高く」（3、177）頬を殴りあい、セリヌンテイウスは「ありがたう、友よ。」と言う。兵営は「一つの大きな家庭」（文部省「小学国語読本・巻七」；「兵営だより」）にたとえられ、「愉快」な生活を送ることになっていたが、しかしそこに陰惨な私的制裁が存在していることは衆知の事実だった。制裁の中には向かい合った新兵同士を殴りあわせる「人格無視」（いまいげんじ「赤紙兵隊記」径書房、1987）で「情なさ」の強い＜対向ビンタ＞があった。制裁を受けた者は「ありがたくあります。」（安岡章太郎「遁走」）と礼を言うことを強要されたりした。メロスとセリヌンテイウスが殴りあうのは「友情を確認するため」（小野正文「「走れメロス」雑感」：「太宰治研究：3」審美社、昭和38年）でもあろうが、それ以上にこの場面は軍隊生活のパロディとなっている。本来は「人格無視」の行為を「友情を確認するため」の行為に昇華することによる軍隊内務班のパロディ化であり、ひいては軍国国家のパロディ化なのである。「走れメロス」は「あげ足」を取られる可能性を多分に内在する作品だった。「走れメロス」は太宰治という作家の時代に対する懸念と批判の意思を内包する作品だったのである。

（完）

### 〔注〕

1. 奥村淳：太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性（「山形大学紀要（人文科学）」第17巻第1号、平成22年；学術文献刊行会編「国文学年次別論文集 平成22年版近代4」朋文出版、2013、に再録）を訂正・修正を含めて参照されたい。（ここでの＜ダモン話＞の数は25である。）
2. 使用した全集は第10次筑摩書房版「太宰治全集」全12巻、別巻1（1989年6月～1992年4月）。以下においてこの全集からの引用は本文において巻数と頁数を示す。（たとえば「3、430」は第3巻430頁からの引用である。）
3. ボンヌについては宮城千鶴子氏の労作がある。
4. 杉田英明：「葡萄樹の見える回廊：中東、地中海文化と東西交渉」（岩波書店、2002、380頁）
5. 以下では「高等小学読本」の「真の知己」は原則として単に「真の知己」と表示する。
6. 近藤周吾：「走れメロス」評釈（「太宰治研究」15、和泉書院、200頁）
7. 松谷みよ子：「日本の昔ばなし(2)」（講談社文庫、昭和53年、180頁）
8. アンドレ・ヨレス（高橋由美子訳）：「メールヒェンの起源、ドイツ伝承民話」（講談社学術文庫、1999、347頁）



# Über DAZAI Osamus Novelle „Hashire Merosu“ — Wandel der „Damon und Pythias“ – Legende in Japan —

OKUMURA Atsushi

Die „Damon und Pythias“— Legende (hier „Damon-wa“ benannt) ist in Japan als Motiv für DAZAIs Novelle „Hashire Merosu“ („Renne Möros“) bekannt und darüberhinaus noch in literarischen Formen erschienen, so in Schulbüchern, Kinder- und Jugendbüchern, in japanischen Übersetzungen von Schillers Ballade „Die Bürgschaft“ und James Baldwins Fabel „Damon and Pythias“, auch in Lehrbüchern über Moral und Handeln der Soldaten. Hier soll versucht werden, diese in die Reihe des Erscheinungsjahres zu stellen. Insgesamt sind es über 160, viel mehr als bis jetzt erkannt worden sind.

Als zweites wird versucht zu analysieren, unter welchen moralischen und politischen Aspekten diese Legende im Laufe der Zeit, von der früheren Meiji-Ära über Taisho-Ära bis zu Showa-Ära, ausgelegt wurde. Diese „Damon-wa“, die in der Meiji-Ära als Vorbild für die Freundschaft zwischen Freunden gelehrt und interpretiert worden war, wurde in der Taisho- und Showa-Ära im Zusammenhang mit den „Kaiserlichen Vorschriften für Soldaten“ („Gunjin-Chokuyu“) als ideales Vorbild von der „Treue“ (shingi) zu Staat und Kaiser behandelt. In „Gunjin-Chokyu“ heisst es, „Die Soldaten sollen Treue und Rechtschaffenheit hoch schätzen.“ („Gunjin wa shingi wo omonzubeshi“) „Damon-wa“ hat im militärischen Staat Japan also eine recht wichtige Rolle gespielt. In einem amtlichen Handbuch für Lehrer, das nach dem Abschluss des „Dreimächtepakts“ (1940) erschien, ist „Damon-wa“ ein Symbol für die Freundschaft zwischen Japan und Italien. In DAZAIs „Hashire Merosu“ (1940) hingegen handelt es sich um Freundschaft zwischen zwei Freunden. „Treue“ soll hier nicht dem Staat, sondern dem Freund und der Menschheit allgemein dienen. „Hashire Merosu“ zeigt DAZAIs kritische Einstellung zur Politik.